

『尋問』

二人の会合は場所を改められた。いや、もはや会合というよりも尋問というべきだ。

移動した先の部屋には机が二つ、椅子が四つ。その場には法と秩序の神官とリュイーズの同僚らしい青年が同席している。

突然の手配であった筈だが、神官も青年もとくに戸惑ったり驚いたりした様子はない。

手馴れている。彼らにとってこういう事態は日常茶飯事なのだ、ポルメリアは気付いた。

法と秩序の神官は、支配階級に委託されて犯罪者の取調べに立ち会ったり、法審理を司ったりする。

被疑者の調書を取り、それを証拠として保管する事なども日常業務だ。

そしてリュイーズたち、フォリヴァス宰相大公の調査官たちも同じだ。彼らは宰相大公の命ずるところ、あらゆる事柄を調べあげる。どんな時にでも可能な限り尋問される者の発言が証拠として利用できるよう手続きをする。

リュイーズ以外に二人の同席者がいるという事は、彼女がポルメリアの発言を証拠として利用しようとしている事に他ならない。

だが同時に、彼女のポルメリアに対する信頼感が薄れている事の証明でもあった。

友人同士ならば、その発言を書面で残す事に、これほど念入りな手続きはしないだろう。

ただひたすら『悪』を滅ぼす事のみを自らの使命と心得ているポルメリアにとって法律の手続きなど知った事ではなかった。彼女がいつも相手をしているのは明白な『悪』でしかなかった。疑わしいが明白な証拠のないものなど対象外なのだ。

ポルメリアの『敵』とは、いつも殺すべきものたちばかりであったのだから。

尋問は氏名、年齢、職業などの確認から始まった。そして大貴族連続暗殺犯の疑いが濃厚な、クレドネエとの関係に質問は集中した。尋問者は、今まで見た事がないほど冷徹な目をした、リュイーズだった。

「彼とは、いつからの知り合い？」

「数ヶ月前からです。彼やその仲間たちに『龍殺し』の旅に誘われ、そして同行するようになりました」

「何故？貴女の相手は、何時だつて人々を虐げる者たちだったはず」

「悪龍も人々を虐げる存在です。それに・・・私は自分が剣を振った結果を考えない様にして戦ってきました。彼ら・・・仲間たちのリーダーはイリネアと言いました。

彼女にそれを指摘されて、私は、自分の力に別の使い方があるのではないかと思ったのです。だから、彼らと旅をしました」

「その後、彼らは？」

「死にました。西方諸国を荒らしまわった、ロスペロッソという悪龍と戦い、皆死にました。私と、クレドネエという例外を除いて」

「貴女とクレドネエは、その戦いの場から一緒に立ち去ったの？つまりロスペロッソを倒したその瞬間に、彼と貴女と一緒にいたのか、という意味なのだけだ」

「いいえ。私は戦いの最中に気を失ってしまいました。再び気がついた時には、その場に私以外の生きている者はいませんでした」
「では何故クレドネエが生きていると解ったの？」

「メルクスで、悪龍が滅びた事を祝う祭りが行われていました。そのパレードの中に、彼は『龍殺し』の英雄として参加していました」

「貴女もそのパレードに参加したの？」

「いえ」

「何故？仲間なのでしょう？」

「ロスペロツソには賞金がかけていました。彼はその首を持って一番手近な諸侯であるメルクス公の下へ行ったのでしよう。私には賞金などどうでもいい事でしたから、仲間たちの遺骸を埋葬した後、ここケルマディクに戻るつもりでした」

「じゃあくレドルエは仲間たちで分配する筈だった賞金を独り占めしたという事なのね・・・それは不正な事ではないかしら」

リュイーズの黒い瞳がポルメリアの藍色の瞳を覗きこむように問い掛ける。ポルメリアはそれを真っ直ぐに見返した。

「そうとは思いません」

「何故？仲間たちには、貴女も含めて賞金の分配を受け取る権利があるのよ。彼はそれを無視した。これが不正でなくてなんなの？」

「私には仲間たちに遺族がいるのかどうかも解らないのです。身の上話を聞いたのは三人だけです。」

二人は家族をロスペロツソによって失っていました。三年前の話ですけれども。

一人は口減らしで故郷から出されたといっていました。それから家族と会ったという話は聞きません。後の二人は、クレドネエも含めて家族の話をした事はありません。

私個人について言えば、賞金の事などどうでもよかったです。

私は皆を守るべき存在でした。彼らを、身を呈して守らなければならなかった。だが私は肝心な時に役に立たなかった。ロスペロツソとの決戦で、その牙に捉えられて噛み砕かれ、洞穴の壁に叩きつけられた。

自分の肋骨が砕ける音を、その痛みとともに聞きました。鎧を砕かれました。壁に叩きつけられた時、これが死である事を実感しました。

でも、私は生きていた。生き延びてしまった。

残されたのは・・・ロスペロツソと仲間たちの死体だけです。

・・・私は・・・あの時ほど自分を情けなく思った時はありませんでした・・・」

ポルメリアの藍色の瞳から、たった一粒涙がこぼれて、机に落ちた。

立会人である神官と書記を務めているリュイーズの同僚は、息を飲んだ。

ポルメリアの口調は、鼻声になろうとも冷静そのものだった。たった一粒の涙が滴り落ちる音。それだけが彼女があらわにできた悲しみの全てだった。その事に神官と書記は気付いた。

だがリュイーズはそれを間近で目撃しながら無視した。

「それでも、彼は仲間達を見捨てて逃げた裏切り者ではな〜て？」

貴女は裏切り者を見逃すというの？正義を実行する軍神に仕える貴女が」

「・・・私にとつては、彼が生き延びてくれた事、それだけが全てでした。彼が幸せであるなら、それで良かったのです」
流した涙の後に浮んだものは、透明な微笑みだった。その美しい微笑をリュイーズは知っている。だから、あえて無視した。
「死んだ仲間への裏切りを許すというの？」

「仲間の間で、そこまでの取り決めはありませんでした。裏切るべきものはありません。少なくとも、私にはあるようには思えません」

この尋問はそこで勝負あったように見えた。ポルメリアには疚しいと思う事がないのだ。疚しい事は自分が生き残った事だと思っているのだから、クレドネエを不問にする事など当然だと彼女は考えている。

リュイーズは質問を変えた。

「貴女はクレドネエがどれほどの腕を持つ盗賊、暗殺者であるかという事を知っていた。彼の居場所も知っていた。それなのに、私に何も言わなかった。何故？」

「仲間であった時、彼が戦いに参加した事はほとんどありません。戦う相手は龍ばかりです。」

私やもう一人の戦士が前面に立って殴り合っていました。彼は仲間の間では探索役です。戦力としては数えられていませんでした。

それに、彼の望みは莫大な財産を得て安楽に過ごす事でした。

メルクス公爵の宮殿に『英雄』として迎えられ、莫大な賞金を手にした彼に、それ以上の危険を冒す理由がないからです」

「そこまで確信している根拠は？」

「彼は一度も、自ら進んで戦った事はありません。そしてロスペロツソと戦う事に最後まで反対していました」

「だがクレドネエがメルクス公爵の宮廷に居候している事は考慮すべきだったわね。」

今、中原諸侯が混乱状態になって、利益を受ける諸侯の中にメルクス公は確実に入る。

公の依頼を受けて暗殺を実行する事は予想されてしかるべきかと思うのだけだ？」

言われてポルメリアの顔色が少し青ざめた。彼女は戦士だ。戦う事には生まれた時から慣れ親しんできた。

好むと好まざるとに関わらず。しかし剣で戦うこと、戦術を駆使する事は学んでも、

貴族としての学問、帝王学や政略、戦略を学んだ事はない。巨視的視点から物事を考える事に慣れていないのだ。

くわえて、かつての仲間、クレドネエを信じたい気持ちもあった。彼の信義というよりも、彼の性向を信じたかったのだ。彼は荒事には自ら進んで加わらない。そんな事は決してない。

だがその居候している宮殿の主に頼まれればどうなる？断ればメルクス公から追われる事になるかも知れない。

巨額の賞金を手にしているが、快適で安楽な生活は一時的にせよ放棄しなくてはならないだろう。

自分の頼みを聞いてくれない『英雄』に軒差しを貸すほどメルクス公が心の広い人物だとは思えない。

リュイーズに指摘されて、ポルメリアはようやくその可能性に気がついた。

青ざめた彼女の顔を見て、リュイーズは少し苛立ちながら溜め息を漏らす。

「貴女が故意にクレドネエの事を隠していたのではない事は、今の態度からも解るわ。」

しかし・・・私は残念です、ランキン卿。しばらくこの部屋でお待ち願いますか？」

力なくうなづくポルメリアに冷たい一瞥をくれた後、リュイーズは神官と書記を促して部屋を出て行った。

残されたポルメリアは自分の迂闊さに腹を立て、そして唇を噛んでいた。どうしてクレドネエの事を忘れていたのだろうか。いや、違う。もう彼は自分とはまったく異なる世界へ行ってしまったのだと思込んでいたのだ。

もはやあくせく働く事のない安逸な生活を得たクレドネエには、身の危険にさらされるような仕事を再びする意味がない。

だが彼がいるのはメルクス公の宮廷。そして、今回の暗殺事件が起こる前に、

中原の七つの大諸侯から連名で抗議を受けていたのは、

中原からあふれ出た難民をことごとく受け入れてきたメルクス公ではないか。

確かに、戦に焼き出され、

疫病で働き手をなくし農地を耕す事ができなくなった人々を受け入れるメルクス公の行為は讃えられてしかるべきだ。

そんな人物が、暗殺などという卑劣な手段で自分に向けられた矛先をかわそうと考えるなど、ポルメリアには信じられなかった。

しかし、現実には中原の混乱で利益を受けている者の中には、当面の政治的圧力、

そして軍事的脅威を逸らす事ができたメルクス公も入っているのだ。

ポルメリアは唇を噛み締めて決めた。一刻も早くクレドネエを見つけ出して問い質さなくてはならない。

彼が無関係で、相変わらずメルクス公の宮廷で安楽に暮らしているならば、それでいい。

だが、もし、彼がこの連続暗殺事件に深く関わっていたら、それどころか実行犯であったなら？

私は、彼と戦えるのだろうか？

彼女は自分の考え付いた事に愕然としていた。かつての仲間と戦う？そんな事を今まで考えた事もなかった。

私は、かつての仲間と戦う事ができるのだろうか。

クレドネエを見過していた悔悟の念から一変して、彼女は今まで一度も感じた事のない苦悩を覚えた。

いや、違う。それは暴君に成り下がった剣の師、ランズベールと戦う事を決意した時と、同じ苦悩だった。

私は再び、身内と思っていた者を殺す事になるのだろうか。

苦い懊悩が彼女の口の中一杯に広がった。

部屋から退出したリュイーズの方も苦悩していた。

あんな風に、全てが彼女のせいだなんて言うつもりはなかった。確かにクレドネエの事を自分に言わなかった事には腹を立てた。クレドネエがメルクス公の宮廷にいるならば考えついてしかるべき事態ではないか。

だが一方ではリュイーズも理解していた。ポルメリアにとってクレドネエはかけがえない仲間の一人だったのだ。それをもたらした一人だけ生き残った戦友。肩を並べて戦った事がなくても、共に籠を狩りたてた日々を共有する者は、もはやクレドネエ一人しかいないのだ。そんな彼を疑うという事は、ポルメリアには不可能だったのだろう。

「だから・・・あの子にあんな風に言うつもりじゃなかったのに・・・」

リュイーズは苦い呟きを口の中で潰した。

所詮、リュイーズとポルメリアとでは持っている危機感が違うのだ。

ポルメリアは戦いの為に殺され、逃げ惑い、飢えに苦しむ人々を増やさないために、真剣に考えているのだろう。リュイーズとてそれを考えない訳ではない。

だが、もっと切実なのは、暗殺事件で日に日に敬愛するフォリヴァス宰相大公の立場が弱くなるという事実だ。

事態は流動的だ。中原の過半の諸侯はフォリヴァス宰相大公につくだろうが、ヤニースは戦略眼に乏しくても行動力がある。交易問題でフォリヴァスと軋轢のある南方のオウルバインは必ずヤニース側に立つ。

シヴァース分家はフォリヴァス側につくが、しかし実権を握っているのはどうやら有力家臣たちの方だ。

中原のシヴァース領と有力家臣の支持を受けた、

北方で自派の結集に奔走しているシヴァースの別の分家フェルザー侯はヤニースにつく。

東方のウォレンサーは伝統的に親フォリヴァスだが、それとて確実ではない。

巨大な赤色龍のロスペロツソに荒らされた西方だけは今回の騒乱に確実に参加しない事、それだけが救いだっただ。

つまり彼女が敬愛するフォリヴァス宰相大公は四面楚歌の状態になりつつあるのだ。

その重大な引き金となった暗殺事件の実行犯を、いや有力な容疑者を、

ポルメリアが知っていたのに言わなかった事、それがどうしても許せないのだ。

いや、彼女が言わなかった理由は理解できる。それでもやっぱり・・・

「ポントワ殿。どうなされた？」

初老の、法と秩序の神に仕える神官が顔色の優れないリュイーズに声をかける。

「いえ・・・なんでもありません」

彼女にはそういうだけで精一杯だった。

「しかしまあ・・・噂通りの嬢ちゃんって事か『城砦落とし』は」

彼女の同僚である青年が呆れたように呟く。それに彼女はするどく反応した。

「何が？」

「何って・・・呆れるくらい、いい気なもんだって、そういう事さ。

自分の『正義』とやらで判断して、都合の悪い事は、ころっと忘れてしまう。そうなんだろう？」

「違うわ」

何も知らない奴が知った風な口をきくな。

リュイーズはそう言うように青年を睨んだ。だが青年は怯まない。

「これはお前の責任でもあるんだぞ、ポントワ。こんな重大な事を聞き取らなかったなんて。一体この十日あまり何をしていたんだか」

「私のミスである事は認めるわ。でも、今そんな事を言い争っている時間はないでしょう。これからどうするか、考えなければ。フォリヴァス勢は劣勢になっている。これを逆転するには、どうすればいいのか」

「クレドネエという者を拘束すべきですな」

まだ何か文句を言いそうになっている青年を遮って、神官がすばやく意見を言った。

青年の意見を聞いているといたずらに時間ばかり浪費してしまうと思ったのだろう。

「彼を問い質し、暗殺を実行したのかどうか確認するべきです。手早くやるべきです。時間がたてばたつほど、事態收拾の機会は失われます」

法と秩序の神は裁判によつて全ての問題を『平和裏』に解決する事を臨む。戦乱は混沌であるという認識に立っているのだ。秩序を重んじる彼らにとつて混沌ほど忌むべきものはない。

一連の暗殺事件で最も利益を受ける者の一人、メルクス公の宮廷で客になっているクレドネエは、最重要容疑者だ。

彼を捕らえて調べあげ、黒幕・・・この場合はおそらくメルクス公だろう・・・を突き止める事ができたなら、

ヤニース家は戦いを起こす理由を失うのだ。理由なき戦いなど混沌の最たるものだ。

法と秩序の神を信奉する神官が最も忌諱すべきものだった。

「・・・まず、メルクス公にクレドネエという者が宮廷に存在するか、問い合わせをしよう。次に盗賊、暗殺者ギルドに回状をする」
リュイーズに文句を言いながらも、青年もやるべき事は考えていたらしい。

神官に指摘されて愚痴をこぼす事をやめたら、スラスラと善後策が出てくる。それに応えるリュイーズの返事も早かった。

「メルクス公の宮廷には私が赴く。結果はすぐに知らせる」

「結果が解っているような口振りだな」

「もしもクレドネエとやらが実行犯なら、

宮廷で大つぴらに匿うと思うか？それにセシル・シヴァースの死で中原は一触即発の事態になったが、まだ火を吹いた訳じゃない。必ずもう一押し、何かをする筈だ」

「いないと解っている場所に行つてどうするんだ？」

「メルクス宮廷と街の様子を見てくる。なんとと言っても、こうなる前は中原諸侯にとっては仮想敵であった諸侯だからな。敵情視察だ。それに追跡するならクレドネエの詳しい情報が必要だ。

我々は奴の名前と『目立たない』という特徴しか知らないんだからな」

「いいだろう。お前の足は我々の中では一番早いからな。ギルドの手配は俺の方でやる。それで・・・あのお嬢ちゃんはどつする？」
淀みなく今後の行動を決めたリュイーズだが、ポルメリアの事になって顔が曇った。

「お前、情が移つたな」

青年に指摘されるまでもなく、自分がポルメリアに深入りしてしまつている事を、リュイーズは自覚していた。

「あの娘とは、ここまですごいわ。」

かつての仲間を前にしてどんな行動に出るか・・・いや、あの娘なら決して私達を裏切らないでしょうね」

「じゃあ連れて行くか？クレドネエの顔を知っているのはあの娘だけだ。追跡するなら不可欠だな」

「あの娘はかつて、暴君となった自分の師匠を殺している。そういう思いは二度として欲しくないわ」

「甘いな。一刻を争う時だというのに」

「そうね。でも彼女の重装鎧は私の足には邪魔よ。クレドネエの顔ならメルクス宮廷でも解るはず。一刻を争うというなら、彼女の足は遅すぎる」

「・・・それは一理あるか。じゃあ『城砦落とし』とは、これまでだな」

事態はここまで進んでしまった。もはや第三者を伴って自分たちの公平性を主張するような時ではなくなっている。リュイーズはフォリヴァス家の利害で迅速に行動しなければならぬ。

公平性を保証する『城砦落とし』ポルメリア・ランキンはもはや不必要なのだ。

「・・・そうね。その通りなのよね」

「えらく残念そうだな」

同僚は悪戯っぽく笑っている。リュイーズはやや頬を赤らめながら彼を睨んだ。

「悪い？」

「我々が忠誠を誓う相手が、宰相大公閣下である事を忘れなければ、別にいいとは思わがな。そんなに気に入ったのか」

「生真面目で不器用な妹みたいなものよ。

もっと色々、人生いい事があるって教えてあげたかった気もするけど・・・仕方ないわね。今は諦める事にするわ」

「今は？」

「あの娘の性格なら、おそらくクレドネエを探そうとするでしょう。何処かで私たちと、また会う事になるかもね」

「それはまずいな。昔の仲間協力されると困る。なんせ、桁違いの戦闘力らしいじゃないか、彼女」

青年は本気で心配している。リュイーズはここで初めて微笑んだ。

「貴方は『悪』？」

「なんだよ、藪から棒に」

「彼女の剣は『悪』を切り裂くものよ。『悪』じゃないなら、手加減してくれるわ」

「なんだよ、それ」

「それに、彼女は正義と秩序を重んじる。クレドネエを捕まえたなら、きっと私たちに引き渡してくれるでしょう。それが彼女にとってどんな辛い事であろうとも・・・」

リュイーズにはそれが手に取るように解っていた。だから自分は彼女よりも先にクレドネエを確保しなければならないのだ。これ以上ポルメリアを苦しめたくはなかった。

「・・・話はまとまりましたかな。クレドネエとやらの事は、我が神殿でも回状する事にしましょう。

中原の戦乱を未然に食い止めなければなりません」

今まで二人の話を黙って聞いていた神官は重々しく口を開いた。

確かに法と秩序の神官としては戦乱を防ぐ為に協力する事は正しい事だが、二人には神官の裏の思惑まで手に取るように理解できた。

ここでフォリヴァスに対して恩を売っておけば、何かと便利であるのは間違いないのだから。

その事に対して二人は嫌悪も軽蔑も感じなかった。恩を売る必要性を感じるのはフォリヴァスが強大だからだ。そしてどんな形にせよ協力を得るのはありがたい事だった。

「ご協力、感謝いたします。神官さま」

「それじゃあすぐにでも始めよう。時間が惜しいからな」

「・・・その前に、あの娘にお別れを言わなきゃ」

「言えるのか？」

「言っておかないと、絶対後悔するもの」

「まあ、好きにするがいいさ」

青年はすぐさま部屋を出て行った。神官も同じ神を信奉する神殿や、その他の善なる神々の神殿に協力を請うための書面を作成する為だろう。ただちに出て行った。

リュイーズは一人でポルメリアの待っている部屋に入る。そこには、憔悴しきった『天使の眷属』が座って待っていた。

慰めてあげたい。

だがそれをする時間もリュイーズには惜しい。全てが終わったら、また会う事もあるだろう。ひよっとしたらクレドネエ追跡行の途中で会う事になるかも知れない。リュイーズは背筋を伸ばして改まった態度になった。

「ポルメリア・ランキン卿、今日までのご協力、感謝いたします。我々はすぐにクレドネエを捕らえなければなりません。御礼の段は、また後日改めさせていただきます。それでは」

「待って下さ」

踵を返して去ろうとするリュイーズの背中に、ポルメリアの必死な声が投げかけられる。

「私はクレドネエの顔を知っています。一緒に行けば必ず役に立ちます！」

予想された申し出。だからリュイーズは振り返らずにいった。

「卿の足では、私の足に追いつけません。既に時は一刻を争う状況です。

卿がクレドネエの顔をご存知でいらっしゃるのは大変好都合です。しかし、あまりにも遅すぎる」

「・・・私がいざとなったらクレドネエを助けると、そう考えているのですね？」

そういうポルメリアの声は、深淵の奥深くから響いてくるように暗い。

それを聞くだけでリュイーズの心臓は締め付けられるように苦しくなった。

私はそんな事は考えてもいない。貴女ならずクレドネエを捕まえ、我々の為に働いてくれるだろう。

しかし、今は一刻を争う時だ。リュイーズはポルメリアの言葉を振り切った。

「他意はありません。私一人の方が早くメルクスへも、そしてクレドネエの居場所にも行けるという事です。それでは、失礼します」

先を急ぎたいリュイーズは焦っていた。だからポルメリアに次の言葉を言わせず、風を切るように部屋から出て行った。扉が閉まる音が、やけに大きく響く。リュイーズはその事に驚きながら、だがもう走るように歩き始めていた。

メルクスへ、一刻も早くメルクスへ。

後味の悪さをリュイーズはそれで誤魔化した。

一人残されたポルメリアは途方にくれていた。捨てられた子犬のように頼りない瞳で部屋の中を見回している。

リュイーズに同行を拒否された今、自分には一体何ができるのだろうか。悲しみに崩れ落ちる事は許されなかった。自分にはまだ戦うべき事がある。ある筈なのだとしきりに言い聞かせる。

それにはどうすればいいのか。

どう考えても、リュイーズの後を追ってメルクス公の宮廷に向かうしかない。最近のクレドネエを見知っているのは彼女のみ。足手まといと言われようとも、彼を見つけ出す手伝いはできる筈だ。そしてクレドネエから詳しい話を聞くことも。

私もメルクスへ向かうべきだ。

拒絶したリュイーズとともに向かうべきではない。重装鎧に身を固めたポルメリアよりも、鎧などまとっておらず、そして足の早いリュイーズと一緒に行動すれば本当の足手まといになってしまう。

それよりも、ポルメリアはポルメリアで別にメルクスへ向かった方がいい。

リュイーズとは別のやり方でクレドネエに近づけるかも知れないのだ。

決めたらポルメリアの行動も早かった。

リュイーズは即日出立した。ポルメリアの同道を拒絶したのだ。

その理由が正当である事を、身を持って証明しなければならぬ。そんな事を言っているような気ぜわしさだ。

ポルメリアも翌朝には出発していた。子供たちと名残を惜しみながら、それでも彼女も気ぜわしく旅立とうとしている。

「ねえ、リュイーズは？」

リュイーズに一番懐いていた悪戯盛りの少年が一人、彼女の消息を尋ねた。ポルメリアは苦笑して答えるしかなかった。

「彼女も急なお仕事で旅立ってしまったわ。でも大丈夫。また、きっと二人で皆に会いに来るわ」

「きつとだよ。約束だよ！」

「ええ、きつとね」

本当はポルメリアにも自信がない。けれどもリュイーズなら必ずこの子たちに会いに来てくれる。それだけは信じられた。

だが、今はともかく先を急ぐ。クレドネエを見つけ出し、彼の行動を確認しなければ次へ向かう事などできない。先を急ぐ。先を急ぐ。

心なしか、いつもよりも背負った荷物が重かった。

殷賑極めるメルクスへの旅は、さほどの苦勞もなく十日あまりで終わった。以前に、ロスペロツソを退治したことを祝う祭りの最中に訪れた時よりも、一段と街自体が大きくなってきているように思える。それは思い違いではなかった。

豊かな自治商業都市のケルマディクにおいては、さほど変化を感じなかったが、ケルマディクの領域を離れば情勢の悪化は火を見るよりも明らかだった。

既にヤニスとイルーク、キスリングの小競り合いは始まっているらしい。シヴァースとハガートの内紛も武力衝突が起こる段階に進んでしまったようだ。

焼け出された避難民の多くは、平和で豊かと噂され、そして避難民を分け隔てなく受け入れるというメルクスに向かって移動している。

避難民に対して閉鎖的なケルマディクは領域境に兵を出し、領内への難民の流入を禁じていた。

しかしそれが当たり前の反応なのだ。誰だって何処だって、幾人もの人々を受け入れ、苦勞を分かち合い、助け合って生きていこうなどとは思わない。誰も彼も自分たちの事だけで手一杯の世界なのだから。

メルクスの拡張工事は最終段階に入っていた。

それはロスペロツソに襲われ逃れてきた人々や、中原の戦乱やそれによる作物の不作によつて故郷を逃れてきた人々を受け入れる為のものだったが、メルクスに集まる人々はそれ以上の規模になっていた。もはや拡張した外郭の城壁でも収容できないほどの人々がやってきている。しかもこれから中原で大規模な戦いが起こる事が予想されるから、減る事はなくても増える一方だ。

メルクスの宮廷では外郭の、更に外側に市域を増やす計画も論じられているらしい。

逃れてくる人々を助ける事が第一であり、彼らをよその土地へ追い払う他の自治都市や諸侯のような事は論外、とでも言うようだ。

本来なら、それは喜ばしい事である。行き場を失い、働く場所を失った人々を受け入れ、城壁を建設する土木工事の人足として雇い入れるのなら、人々に食と職を与える一石二鳥の策である。

だが、ここでボルメリアは疑問に思った。

メルクス公爵はたかがメルクス公爵領を治めるに過ぎない諸侯だ。

公爵領はだいたい都市五つとその周辺領域から成り立っている。メルクスは元から数万人が住まう大都市だが、他は数千人、もしかしたら千人程度しか住んでいない小規模の都市ばかりを支配している筈である。

都市の領域は、それらの都市人口を養うに足るだけの農村を含んでいるだけだから、目立った産業を聞かないメルクス公爵領に二十万とも三十万とも言われる難民を養うだけの資金力はない筈だ。

一つの公爵領、一つの侯爵領、三つの伯爵領、二つの子爵領、一つの男爵領を支配し、大規模な港湾、交易都市を十指に余るほど支配するフォリヴァス家とは、規模も力も比較にならないのだ。

そのフォリヴァスとて二十万人の人が住む大都市を新たに建設する事はしない。できない。

天候が不順で不作が恒常化した最近のこの世界では、

今そこに住んでいる人たちでさえも食べさせられるほどの実りを与えてはくれないのだ。

普通に考えれば、メルクス公爵程度の諸侯ではこんな大規模な都市を建設するなど自殺行為にも等しい筈だ。それなのに、何故そんな事ができるのだろうか？

リュイーズと付き合ったせいかな、ポルメリアは今まで疑問に思わなかった事なのに、不思議に感じ始めていた。

あちらこちらから建物を建てる槌の音が響いている。ポルメリアはそんな賑やかで活気に満ちた町並みを一路宮殿へと急いだ。

皆穏やかで幸せそうな顔をしている。この建設に費やされる費用をメルクス公がどこから得ているのか。

そんな事を考えるのは、何か冒険的な事のようにも思え気恥ずかしくなる。それを誤魔化すように彼女は道を急いだ。

宮殿の門衛は、ポルメリアが用件を述べると快く案内してくれた。こんなに愛想のいい門衛は初めてだ。

大概門番というものは不意の来訪者を全て強盗か、泥棒か、詐欺師かと言わんばかりの態度で接するものなのに……。

不快である筈がない。だが彼女は何故か薄気味悪さを感じていた。

「クレドネエさまの知人でいらつしやると？」

門衛から案内を引き継いだのは、少し顔色の悪い長身の男だった。

「はい、昔馴染みです。彼がこの街に滞在していると聞き、久し振りに会いたいと思ひまして。

彼がこんな立派な宮殿にご厄介になっているとは知りませんでした。場違いなところへ来てしまったものです」

咄嗟に思いついた嘘を並べてポルメリアは自分で自分自身に驚いている。

しかし暗殺の容疑者に会いに来たなどというよりも話はスムーズに進むだろう。彼女は自分の嘘に納得した。

「左様でございますか。クレドネエさまは『龍殺し』の英雄でございますから、我が主も精一杯のおもてなしをしております。

しかし、幾日か前から、クレドネエさまは、やらねばならない事ができた、とおっしゃいまして旅に出られましたね」

長身の男は気の毒そうに続ける。

「先日もフォリヴァス宰相大公の側近とおつしやる方が、

是非にクレドネエさまを宰相大公閣下の幕下に迎え入れたいとおいでになりましたが、あいにくと入れ違いでした」

おそらくリュイーズに違いない。焦っているのかメルクス公側に疑われても仕方ないフォリヴァスの名を出してしまっている。

しかしそれはあまり気にされなかったのだろうか？目の前の男は特に感情の変化もなく、ただ気の毒そうにうばかりだ。

「彼の部屋を……見せていただけますか？」

「何故ですか？」

「いや、思い立ったからにはどうしてもやりとげてしまいたい性分なのです。彼の行き先が解るものなどないだろうか……」

「しかし、ご友人であつてもご本人の許しもなく勝手に部屋へご案内する訳には……」

「そうですね……すみません」

しかしそう言つてポルメリアが肩を落としてみせると、男は深い溜め息をついていた。

なんと言つてもポルメリアは可憐な少女だった。

憂いに満ちた表情を浮べ、頼りなくうつむいて見れば、何とかしてやろうと心も動く。

案内の男は職務よりも情を優先させてしまう質のようだった。

「・・・仕方ありません。少しだけですよ。くれぐれも、ご内密に」

「ありがとうございますー！」

男が先に立ちボルメリアを導いたのは、宮殿の客間といつてもよい南向きの、日当たりのよい場所にある部屋だった。主不在でも宮殿を管理維持している召使達が整理整頓、

掃除などをしているので特に汚れていたり使われていないという印象はない。

部屋の中の家具や調度品は、良いものなのだろう。武具にしか詳しくないボルメリアには良く解らない。しかし手入れは念入りにされているようだ。

だが中に入ったところでボルメリアは愕然とした。自分はクレドネエの仲間と言いながら、彼の趣味や好みなどまるで知らないのだ。部屋の中には『龍殺し』の記念品らしきものがある。

避難民たちが送ったと思われる感謝状の束もあった。しかしそれ以外にクレドネエがいた痕跡が、ここにはない。いや、ないように思えた。もしもここが急遽でつちあげられたクレドネエの部屋だとしても解らない。

それでもボルメリアはここがクレドネエの部屋である事を信じる事にした。クレドネエの特技は『目立たないこと』。

その場にいるのかも解らぬほど気配を消すことだった。彼は自分がいた痕跡を消すなど、いとも簡単にやってのけるだろう。

では、ここに来た事は無意味で、結局彼の行方は解らないのだろうか？

いや、そんな事はない。何気なく開いた机の引き出しに、無造作に突っ込まれた羊皮紙の束がある。

反故紙のようなものに走り書きがいくつか書き込まれていた。おそらく彼が調べものをした際のメモか何かには違いない。

どうやらクレドネエが向かったのは、『天使王国』の王都アンゲルウルプのようだ。王都といつても『天使王国』に王はいない。

統治する王が不在のまま二百年の時が過ぎている。今は王国を統治すると称している宰相が管轄している都市に過ぎない。

そして今の宰相はフォリヴァス家の当主、カシユール。リュイーズが敬愛する宰相大公閣下だ。

ここにあるメモ書きは、ただアンゲルウルプへの道のりと、旅をする際の注意事項が書かれているに過ぎない。

だがこれを目にしたリュイーズが慌ててアンゲルウルプに向かうだろう事は予想できた。

この部屋の中に、他にクレドネエの行き先を窺わせるようなものは残されていない。

彼は本当にアンゲルウルプに向かったのだろうか？向かったのならその目的は？

クレドネエが一連の暗殺事件の有力な容疑者であると睨んでいるリュイーズならばすぐにこう思いつくだろう。

中原の混乱をいや増す為に、最大勢力であるフォリヴァス家の当主、宰相大公カシユールを殺す事であると。

急がなければならなかった。最悪、リュイーズとクレドネエは戦い始める事になる。

かつての仲間が、彼女の友と呼べる相手と殺し合いを始めるなど、ボルメリアには想像したくない事だった。

止めなければならぬ。例えそれが杞憂であったとしても、急がなければならぬと彼女は感じた。

「ありがとうございます。すぐにでも彼を追う事にします。あ、そうだ。足の早い馬を貸してくれる馬屋をご存じないですか？」

「さあ？しかし宿屋街なら、飛脚や早馬を用意している店がありますから、ご希望の馬は見つけられると思いますよ」

「・・・ありがとうございます」

男の言葉に丁寧な礼で返したポルメリアは、二度と振り返らずに宮殿を後にした。急ぐ。急がなければ。その思いが彼女の足を早めていた。

そんな彼女の後ろ姿を見送って、男は彼女の後ろ姿が見えなくなって、ようやく安堵の溜め息をもらした。

「ひやひやさせる。そのまま何も気付かずに、あの盗賊あがりの男を、遙かアンゲルウルプまで追い駆けていってくれよ。こっちの仕込みは後一息。この俺が、上級悪魔になれるか、どうかって瀬戸際なんだからな」

装う必要のなくなった声は、『ワーム』に従う召喚師のものだった。

彼が現場監督をしている、メルクスの城壁でかたどった強固で巨大な魔法陣はもうすぐ完成する。

メルクスに住まう全ての人々の魂を捧げれば、彼を一足飛びに上級悪魔に昇格させる。それが『ワーム』が彼と交わした約束だった。

異界の強大な力を手に入れる。その為だけに彼は生きてきたのだ。

「ばいばーい、善なる騎士さま。もう一度と会いたくないってもんだよ」

彼の言葉は口の中で、泡のように消えていった。